

女^世

≠技術。

ただ書けばいいというものではない。

ピカソもモジリアニが 初めから あんな糸を掛けたか！

頭の中で いいこと いっぱい思いついても ⇒ 技術が ともなっていない
いざ机に向かっても書けない

なぜ書くか
なにを書くか
どういう風に書くか

それを
つかお為に

読ま

見る

書く

書こうとしている人は ものの見方がちがう！！

① プロセスが大切

基本がなっていないと すぐにだめになる

(なくても 2~3作くらいは かける)

② 形式が重要

何を書くかは 人から教われないが

形式は 学ぶことができる

※文章は 助詞ひとつで ガラリと変わるよ。

↓ だからといって 先人の 物真似人はイカン

→ オリジナリティ

創作 = 2文字とも「つくる」の意だが
創りは 新しく作る という意味をもつ

◎ 新しいものとは... 自分が知ってるけど皆は知らないこと
内容、文章の書きかた、ナドで良い

良い作品とは 時空を超えて残る!!

◎ 石原慎太郎の「太陽の季節」なんかは ×チャチャだが
時代をとらえていたことはたしか。

◎ 木下尚江の「限りなく透明に〜」は新しい若者像を描いている

◎ 山田詠美の黒人との性愛は、小説として初めて書かれた。

新しいものを書く ということを楽しめるべし

ぶっちゃけ 新しい作品は 1作だけで良い。

人は小説を読んでもその内容をほとんど忘れる。
しか、良い一冊があったら それだけは一生覚えている。

コトは拒絶するや入っていかない

小説 ... 読者は読者の馬鹿ができる
書いた人の呼吸がわかる

感情は読者にゆだねる

悪いが良いは自分で書かない

木下尚江の
新しい
文庫
だった。

差別はよくない

→ もともと人はみんなコトヲ
差別はコトヲを増幅させる

※ いろんな価値観があるのに「きれい」の一言では伝わらん

例えば... 「ひまわりのような人」なんてよく言うが

時間帯、季節、天気とかによって ひまわりは全然ちがう
そこを 書かなければ いけない。

① どんな人でも やる気、情熱が重要

なぜなら 必ず 行動力が 伴うから。

② そして 賞悟が、必要。 できないこともできる力になる!!

どんな仕事でも そうだけじゃねー

疑声・疑態は多岐な文章。

重作をきちんと文章化してみるや。

そのためには必ず 疑う こと。

(書いている自分を疑う。
「あたりまえ」を疑う。
コトバを疑う。)

★ 一番わからないのは 自分

自分が どんな人間かを決めるのは 自分ではなく 周囲。

作品も同じコトで ござす

一方的にレッテルを貼らない。決めつけない。

★ 文章は あたりまえ = 書くと大抵まちがえる。 ex) 神社は古い? → 明治

石版かめな
通り一遍の
ことしか
書けん。

★ 履歴書 = 経験を歴然とさせる書。 とやうに コトバにはきちんと意味がある

あたりまえに入っているつもりで 言葉でも正しいのか きちんと考えて!!

あがってても辞書をひく → そこからまたたがえるものがある

②小説書くのをあきらめない

過程はたいがいつらいもの。でも楽しくなるまでやる。

文学には学歴も年や性別も何も差別はない

ただ一点、才能において差別がある。

↓
何の才能？ = 忍耐力。

地下資源 ← 自分では見つけられない
他者により見出される

懸命にやってる人しか手は差し伸べられない
調子よく書いたものより苦しんで書いたもののほうが
好評価をえられるものだよ〜

書くレッスンは 考えるレッスン

時間がものをつくる。矢張り自動的にってはダメだよ〜

読む・書く・見る ← 「たくさん」をつけよう

③小説とは結局 人間を深く書くこと である。
複雑な感情。

自分の文・スタイルを掴む!



量から質は生まれるものと思うべし

(ものをよく見て よく疑うことで
自分というものが よくわかってくる。)

質疑コーナー

Q. 書いていてもつらいくらいばかりで楽しくならない

A. そんなもん。楽しくなるまでというバ構築で。

時間ない中で、たとえば「仕事から帰ってすぐに書く習慣を。

1杯飲んで風呂入って「さて書くか〜」ではダメ。

とにかく書くことをまずと考える。

2〜3作で賞もらえるものではない。50作くらいみんな軽くボツに。

(中略) ながくだらん質内ばっかじゃねーか

Q. 日常から小説に書きおこすまでの過程が「おもしろいのですが」

A. やっぱおもしろいもんだけじゃね?